

アート・リサーチセンターと中井文庫の絵馬図絵集

『花洛絵馬評判』と『額面狂歌集』の紹介

岩切 友里子(立命館大学衣笠総合研究機構 客員協力研究員)

はじめに

浮世草紙『西鶴織留』巻四の二命に掛の乞所「の絵馬医者と呼ばれる男の言に、「物どして絵馬は万人の目にかゝればかりそめながら大事のものなり」とあり、諸人が絵馬に大きな関心を寄せていたことが窺われる。絵馬の図様は、これを写した版本として出版され、絵師と鑑賞者の共通の図像知識となり、浮世絵の武者絵、武者絵本の典範となり、長く受け継がれている。

アート・リサーチセンターは、絵馬図絵集として、『花洛絵馬評判』(arcBK02-0328)、『扁額軌範』(文政二年(1819) arcBK01-0012)、『巖島絵馬鑑』(天保三年(1832) 厥成・嘉永元年(1848) 発行 arcBK01-0164)、『諸国 絵馬集』(大正七年(1918) arcBK01-0113)を所蔵している。また、ARC 古典籍ポータルデータベースに公開されている中井文庫には、『額面狂歌集』(nakai1152)が蔵される。本稿ではこの内、『花洛絵馬評判』、『額面狂歌集』の二書を紹介したい。

1 『花洛絵馬評判』 arcBK02-0328

半紙本、三冊。金屋平右衛門版。序文は次の通り(句読点筆者)。

序

武者に源平藤橘の四性あり。絵師に土佐、狩野、長谷川、海北の四家あり。四性わかれて百性となれり。絵の四家流れをくみて百品となる。百性の中に貴きあり、いやしきあり。百品の内に名人あり、下手あり。今載所の絵すぐれしを多

らみうつして俗説を書そへ世のなぐさみとなせり。猶もれたるをあつめて跡よりおひく板行に出すのみ

正徳六年 申の三月吉日 洛東 ひら自序

刊年はこの自序にある正徳六年(1716)と見られる。柱刻に「武者揃」とあるように、二十六種の武者絵馬の図を、額面にある絵師の名、奉納の年紀とともに写し、各図に描かれた武者の故事を説き、さらに一般に流布する俗説に対する評を付す。所載される絵馬の年紀としては、天正二十年(1592)長谷川久蔵の草摺引(清水寺に現存)が最も早く、宝永二年(1705)の吉田光義の義経人艘飛が最後のものとなる。

享保十四年(1716)の『新撰書籍目録』には、「武者雛形」三冊とあるが、筑波大学図書館蔵の同書は『花洛絵馬評判』の改題本で、巻末の板元金屋平右衛門の板行目録である『風流絵本出来之分』を削除している。さらに後年、『絵本武者評判』(京都大学附属図書館、神戸樟蔭女子大図書館蔵)と改題されたものでは、絵馬図中の絵師の名と年紀、絵馬の額縁が削除されており、絵馬図集をそのまま武者尽くしの絵本として改変している¹⁾。正徳六年本『花洛絵馬評判』としては、国会図書館本が知られていたが、これは中巻を欠く二冊で、上中下の三冊揃った同書の所在はこれまで他に知られていなかった。『武者雛形』、『絵本武者評判』とも、現状では、オンライン公開されておらず、中巻が ARC 蔵本の閲覧可能である²⁾とは喜ばしい。

巻末には「風流絵本出来之分」として、二十三種の書名が記されている。これらは、折帖仕立ての絵本で、唐団扇形の枠内に図が描かれる。国会図書館蔵の『しだれ柳』の序文から、絵師は京の大森善清であったと考えられている³⁾。この風流絵本の内、『花洛絵馬評判』と関係が深いのは、最初に挙げられている『よういさくら』で、現在確認

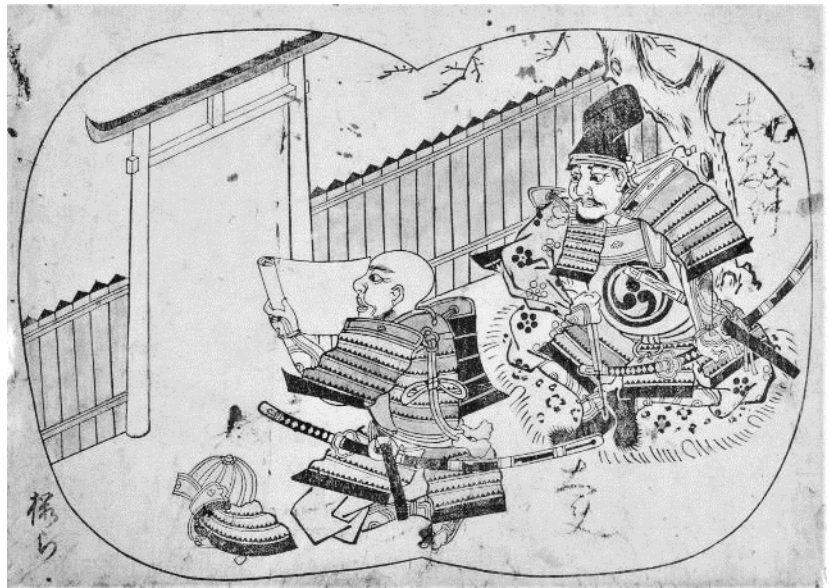


図1 大森善清『よろいさくら』個人蔵

されている八図や、『よろいさくら』と『むびらの梅』を取り合わせて袋綴本とした後『繪本鎧桜』の図を検討すると、『花洛繪馬評判』と共通するものが数図確認され、『よろいさくら』の図が、実際の繪馬を写したものであることを示すものとなる。

「木曾願書」の一例を挙げると、図1は『よろいさくら』で、図2が『花洛繪馬評判』中巻所載の明暦三年(1657)の小林信重筆の繪馬図である。

武者繪馬は武者画題・図様のイコノグラフィーとして重要なものであるが、実際には保存が難しく失われてしまったものも多いことであろう。本書は、現存していない繪馬の情報をも知ることのできる図繪集として、また、武者画題が一般にどのような解されていたかを知る上でも、貴重な一書である³⁾。



図2 『花洛繪馬評判』中巻「木曾願書」立命館 ARC 蔵([arcBK02-0328-2](#))

2 『額面狂歌集』 [nakai1152](#)

本書は書名のみは知られていたが、その所在が確認されていなかった狂歌集で、中井文庫蔵の同書は新出のものとなる。

扉に「東都神社仏閣 額面狂歌集」とあり、債主は花園連・花源洞、撰者は臥龍園老師(臥龍園梅麿)、画工は葵岡北溪(魚屋北溪)で、文政丙戌年孟春(文政九年(1826))刊である。巻頭の見開きの図には、「浅草寺堂内額面写」として七面、「芝愛宕山額面写」として七面、「柳島妙見宮額面写」として六面、「東大宰府宮額面写」として三面の繪馬が北溪の筆によって写されている。額の枠部分に散らされているのは、

各狂歌師の属する狂歌連のマークの意匠である。続く狂歌部分は、二月から八月の景物を兼題としており、高位の点の狂歌が額面図の中に入っているが、図と狂歌の直接的な関連はない。

浅草寺の額面の内には、天明七年(1787)の高嵩谷の鶴退治、享和三年(1803)の高嵩溪の狸々舞、寛文四年(1664)の猿若勘三郎人形額など、現存するものもあり、北溪の図との比較も興味深い。

絵馬図集は、前述の『花洛絵馬評判』や『扁額軌範』、『殿島絵馬鑑』など、京や西国の絵馬に関するものが知られるが、江戸の絵馬に関しては、斎藤月岑の編『武江扁額集』(文久二年(1862)序)⁴⁾のほかは知られておらず、『額面狂歌集』に写された図は、当時の江戸の絵馬図様を知る上でも重要である。

江戸の人々が絵馬扁額に大きな関心を寄せていたことは、図絵集だけではなく、絵馬が一枚摺の錦絵や摺物の意匠や趣向として用いられていることから窺われる。窪俊満は、文化二〜三年に「扁額写」シリーズの摺物を制作しており、菊川英山は文化四年の「当世絵兄弟」という大判錦絵のシリーズで諸所の額面をコマ絵とした美人画を描いている。歌川国貞は「御詠絵馬尽」という美人画シリーズで、やはり絵馬をコマ絵としているほか、「浅草観世音額」として高嵩谷の鶴退治を、「三圃稲荷ノ額」では高嵩谷の牛若丸と弁慶の絵馬を写した大判二枚続の錦絵がある。

窪俊満の扁額写シリーズ摺物の一図、「芝愛宕山扁額写」(図3は、菊川英山の「当世絵兄弟 芝愛宕山之額」(ライデン民族学博物館所蔵・RV-1353-174)のコマ絵にも描かれている。この額は、『額面狂歌集』の「芝愛宕山額面写」の「其五」として所載される額と同じもので、「其六」と併せ見れば(図4)、元来は石段を馬で上り下りする武士の二面の図であったこと、勝川春章の筆になるものであったことが判明する。俊満の図は、かつて寛永の三馬術の一人である曲垣平九郎を描いたものとされることがあったが、月岡芳年「東錦浮世稿談・松林斎琴鶴・曲木平九郎」(arcUP5256)に見るように、曲垣平九郎は幕末の講談で詠まれた人物である。蜂屋茂橋の随筆『権の實筆』巻十八の十七には、茂橋が天保八年十月に愛宕山に上った時のこととして以下のような記事がある⁵⁾。

○日向東蔵

同所の山門の左右に豎四尺ばかり、横二尺餘の絵馬二枚をかけたなり。是、昔日



図3 窪俊満「芝愛宕山扁額写」
町田市立国際版画美術館蔵



図4 『額面狂歌集』「芝愛宕山額面写」其五・其六 中井文庫蔵(nakai1152)

向東蔵と云人、此石坂を馬にのりて上下せし時、奉納せるものにて、一枚は素襖、侍烏帽子にて栗毛馬にのり、石坂を上る図、一枚同じさまにて下る図なり。惜哉、往々摩滅してぬしの名も日向東蔵とばかりよめて、その下の名のりハしれず、年号月日もしるしたらんなれども見えすはつかに、勝川春章図とかきし画名と印のみほのみえたり、今より年をへば、全くきへ失んと思へば、書付つ。

この記事と『額面狂歌集』の図によつて、勝川春章が日向東蔵を描いた二面の絵馬であつたことが判明することは、喜ばしいことである。

柳島妙見宮の其二の勝川春英筆の加藤清正の虎退治図も、本書によつて初めてその存在が確認されるものではなからうか。

其一に人形師原舟月の亀、其六にも亀の額があるのは、妙見菩薩の足元の亀によるものと思われ、北斎が寛政十年(1798)に北辰妙見の信仰を示し、「辰政」と改名した折の摺物にも亀が描かれている。

〔注〕

- 1) 京大大学本は五巻本で、上巻を「一」「二」、中巻を「三」、下巻を「四」「五」と分割しており、巻一の末尾に巻二の項目題が残るなど、無理に分割したことによる不備がある。目録丁は、「絵本武者評判 目録」とし、列挙する項目の絵馬の絵師名を削除して項目が掲載されている巻と丁を表示する。巻五末尾は半丁全体を刊記として中央に「寛政六寅歳夏 京都書林」とのみ刻す。
- 2) 大森善清の絵本については、浅野秀剛「京の絵師、大森善清」、『菱川師宣と浮世絵の黎明』第六節、東京大学出版会、二〇〇八年に詳し。
- 3) 絵馬図譜と武者画題に関しては、拙稿「絵馬図譜と武者絵本」(鈴木淳・浅野秀剛編『江戸の絵本』八木書店、二〇一〇年)参照。
- 4) 『武江扁額集』は斎藤月岑の稿本であるが、大正八年に稀書複製会から複製されている。
- 5) 『権の實筆』は蜂屋茂橘の自筆稿本が、東京都立中央図書館に蔵される。『随筆百花苑』十一卷(中央公論、昭和五十七年)参照。

アート・リサーチセンターと中井文庫の絵馬図絵集——『花洛絵馬評判』と『額面狂歌集』の紹介

【額面狂歌集所載額】 ※画題は筆者による。

浅草寺

1. 源三位頼政鶴退治 高嵩谷

2. 六歌仙 麦藁細工

3. 関羽 北越蘭斎

4. 岩国錦帯橋 江漢司馬峻

5. 猩々舞 高嵩溪

6. 猿若勘三郎(人形額)

7. 神馬 古法眼元信

芝愛宕山

1. 迦陵頻伽

2. 愛宕山太郎坊

3. 大筒図

4. 芝八景(芝浦の帰帆・大井の落雁・袖ヶ浦の夜雨・羽田の夕照・溜池の残雪・愛宕の晴嵐・御殿山の月・増上寺の晩鐘)

5. 日向東蔵、騎馬にて石段を上る図 勝川春章

6. 日向東蔵、騎馬にて石段を下る図 勝川春章

7. 並び矢

柳島妙見宮

1. 亀 原舟月

2. 加藤清正虎退治 勝川春英

3. 盆踊り 高嵩濤

4. 松樹 閑菊潭

5. 梅樹

6. 遊亀図

東大宰府天満宮(亀戸天満宮)

1. 舞楽図・蘭陵王

2. 舞楽図・打毬楽

3. 牛天神